墓をさがす

高木敏克

この春、桜を追いながら川沿いをサイクリングしていると、ただのサイクリングだということを忘れて旅に出て夢に迷う気分になってきた。忘れてしまった遠い路地の記憶を引き寄せるように走っていると、懐かしい迷路に迷い込んでしまったのだ。路地裏サイクリングとでもいう走りかたで、坂道が立体的に絡む地形をけち臭く楽しむことができる。変速機の付いた自転車で走っていると丘は遊園地に変わっていくようだ。さらに坂を上ると墓地に突き当たってそこで行き止りになってしまった。小さな町内会館がその横にあり、その奥に墓の管理事務所があった。ここに来るのは随分と久しぶりで幼稚園の行きかえりにたまに通ったことのある石垣に挟まれた袋小路だった。自転車を降りて墓場に咲いた桜の花を眺めていると墓を探している老人に出くわした。見るからに墓場で迷っている徘徊老人だ。

老人はまず私のロードレーサーをながめて近づいてきて「自転車では墓地に入れませんよ」といった。

「どなたのお墓を探しているのですか」と聞いてもしばらく黙りこくってから

「ちがう。自分の墓を探している。家族の墓なんていりませんよ」という。

老人はちゃんとした身なりで、ジーパンの上にデニムのブレザーを羽織っている。

「家には戻れないので、墓にもどるしかない」と、決意表明のようにいいはなったので、てっきり認知症の症状かと思えて気の毒になってきた。

「墓を買う金はあるのだが、探していた海の見える小さな墓地がここで見つかりましたよ」と笑いながら私の顔をじっと見た。幽霊に見られるというのはこういうことかと思って、はったりをかました。

「そんなことは聞いていませんけど」

墓を探している人は実に不気味だった。誰かの墓ではなく自分の墓を探しているというとは、最も不気味な墓参者だ。お盆になったらこの老人は空の墓を拝むのだろうかと思うと目の前の桜の空が真っ暗に見えてくる。幽霊の墓参りとは、ありえない話だ。

「よかったですねえ。ご自分のお墓が見つかってよかったですねえ」と私は逃げるようにうなずくしかなかった。

墓については何も考えたことのない私には墓の意味というものがもう一つ呑み込めなか

った。空の墓を作るということは考えてみると皇帝のようでもある。この老人も自分が永遠に続くことを願っているのだと思えた。ところが個人の墓が増えているらしい。

「さっき、この墓地の管理事務所に連絡が取れまして、ここはてっきり下のお寺のものだとおもっていたら、そうではなくて公共の墓地らしいんです。わたしは無宗教なのでよかったです。家の墓は山奥にあるのですがね、そこは遠いし、ここは権利だけ買い取れば誰だって入れるお墓だということです」といっても、果たして誰が参りに来るのだろうか。

私には関係ないと思うが、ふと思った。人間には墓場まで持ってゆくしかない隠し事や言ってはならない秘密があるという。この老人はそんな沈黙を埋めて見えも聞こえもしなくするために闇を求めているのかもしれないと思ったが、墓というのはますます怪しい存在に思えてきた。そう思うと、この老人は認知症などではなく普通の孤独な老人だと思えてきた。人間は闇を求めていて最終的に墓石の中に闇の天国を求めているのかもしれないと思えてきた。特に家族の墓よりも個人の墓を求める人は名声を求める人で死んだら有名になって崇拝者が拝みに来ると思って家の墓では飽き足らずに自分だけの墓を求めているのではないかと思った。

黙っていたが孤独な老人はどうも私が思っていることを見抜いているようで、

「どうせ誰も私のことなんて拝みに来ないと思っているでしょう」といった。

「そうは思いませんけど、あなたが有名な人だったらご自身でご苦労されてお墓を作らなくっても、ファンの方や役所のほうで作ってくれるんじゃないですか」と言ってみた。

「とんでもない。誰かが勝手に私の墓を作るなんて許せませんよ。誰かのつごうで生まれてきた私ですが、今度は誰かの都合で勝手に葬られるなんて、知らないところに私の墓が作られるなんてたまったもんじゃない。わたしは自分の権利として墓は自分で選びたいのですよ。わたしは海の見える丘の上の墓がいいのですよ。もうあんな呪われた家族の墓には入りたくない。あの墓に入るのは別の罰を私に与えるようなものだよ」

「でも、ご自身でお墓を作るなどということは自画自賛だと思われがちなので、そうしない人が多いのではないでしょうか?」といったのは、どんな顔をするのか見るためだった。

「よくおっしゃってくださった、さすがに自転車に乗っておられる方はえらい。もし私が有名になったらと思うと心配でならないのですよ。わたしは無名ですよ。わたしは闇の中に消え去りたいのです。あなたは失礼な方ですよ。わたしのことを有名無実とでも言いたいのですか。あなたは闇の尊厳すらわからない無教養な人です。闇とは無名性ですよ。この尊厳を打ち砕いて有名志向の馬鹿者たちは無名であることを許さない。挙句の果てにはわたしの闇が売りに出されるのですからね。破り忘れた没原稿や有もしない恋愛事件だとか掘り出されて私の闇を暴くことが文学だと思うような評論家が出てくるのですよ。彼等

は墓荒らしとなってミイラの中まで暴こうとするから地獄の墓となるのです。ですから、贋の墓が必要なのです。お盆や誕生日に帰ってこられる自分だけの墓が欲しいだけです。その空の墓こそが安住できる墓だと思うのですがどう思いますか」

「でも、安住できないのではないでしょうか、あなたが自分の墓を作ったらみんなが個人情報の盗掘に来ますよ。ただ一つ言えることは、自分で作った墓のほうが迷わずに帰ってこられますね」

「わたしの墓には他人は入れないのです。家族の墓には骨壺があって邪魔ですからね」

「じゃあ、いずれにしろ墓には中身がないのですね。焼き忘れた原稿や手紙は書斎にあるでしょうから、そこまで自分の墓にこだわるのか私にはわかりません」

「お気遣いありがとうございます。そのことこそ私にとって最大の不幸です。詩人の人生は消し去ることでもあるのですよ。消し忘れは詩人にとっては失敗です。ところが、有名になることしか願わない馬鹿な田舎の詩人たちはわたしが消し忘れた未発表の詩を刑事の家宅捜査のようにほじくりだして、私の全集だといって原稿料と編集料とを抱き合わせにして出版社からもらおうとするのです。有名人というのは田舎者の馬鹿な私の家族に似ています。有名になることが人間の目的だと思っているのです。そういう人間には文学の価値なんて理解できないのです。大量出版や大量生産で生まれてきた価値観に流されている放送界の芸人と同じですよ。有名人というのは資本主義経済のブランド商品ですよ」

どうやら下手な自己否定で有名は嫌だと言っているだけの有名老人の前に現れたのは老人と同世代だと思われる女性だった。わたしのお花見サイクリングは墓場でやっと終わることになりそうだった。

「あら、先生。こちらの方はどなた？　息子さんですか？」

有名人の息子呼ばわりされたくない私は慌てて返事をしてしまった。

「いや、とんでもありません。この先生とは無関係な、いや、誰とも無関係な、ただの自転車乗りです。お花見サイクリングをしているだけです」と言いつつ、その場を立ち去ろうと思った。

「あははは、この人は他人とは思えない、よい青年ですよ」

と、先生と呼ばれる有名老人は笑い続けていた。

話しぶりからも、その老女は墓地の管理を代行して電話を受けているご近所の方だと分かった。老人の声は耳が遠いせいか大きすぎてよく聞こえた。わたしがいることもすぐに忘れてしまっているようなので入口のベンチで自転車を抱きかかえて私服刑事のように老人の会話に鋭い狐の聞き耳を立てた。

墓場の西山とよばれる丘の脇にある長田高校が母校で、この墓地の路地は袋小路になっ

墓をさがす

ているのでめったに通ったことがない。昔から近所に住んでいる人でさえ、そこに家族の墓でもない限り通ることのない道だという老女の話は同窓会みたいに盛り上がっていた。

「一、二度わたしがここを通ったのは長田神社の横にある教会の幼稚園に通っていたころで、柳の木の下の石垣にたくさんの蝸牛をみつけた梅雨時でしたね。墓場の下の石垣を見ていると大きな蝸牛が柳の木に登るために土の中から這い出しているように見えましたよ。でも、あの当時の柳の木はないのですね」

「そうですよね、昔は柳の木が平気で墓地に植えられていましたけど、幽霊が出てくるので桜の木に植え替えられるようになりましたね」

「そうですか、わたしはね、蝸牛を小さな通園用のカバンに入れて幼稚園に行ったら昼食の時間に蝸牛が出てきて、先生がでんでんムシムシかたつむり、と歌ってくださって、泣いてしまいましたよ。怒られなかったのがうれしくてね」

「あら、素敵な思い出ですわね。だったら是非ともここにお墓を作りなさいよ」

「そうですね。何も語らず海を見つめることができるなら、ここは最高ですね」

「そうですよ。ここはお寺も教会も近いし、宗派を問わない公共の墓地ですからお入りなさいよ」

「わたしはね、ここはてっきりこの下の福聚寺という臨済宗南禅寺派のお寺の檀家のお墓だとずっと思っていましたよ」

「だから、入れないと思っていらしたのですか。ところで、ご宗派は」

「生まれたときは丸裸、幼稚園はプロテスタントの教会で、今は出家の身です」

「ええ、どういうことですの」

「あはは、ふつうは家を出て寺に入ることが出家でしょうが、私の出家は寺を出て無宗教になることが出家なんです」とまた変わったことを言っていた。

「まあ、おかしなことをおっしゃって、唯物論者さんですか」

「ただものですよ。土にかえる埃ですよ。あなたに会えてよかったわ」

「あら、面白いことをおっしゃって、長田高校には変な方がたくさんいらして、ほほほ、わたしは星の丘の星陵高校ですわ」

老人は墓を買うという、最後の悪行に身を染め始めたみたいだ。